

光村図書ウェブコンテンツのご案内

「生徒作品ギャラリー ART BY STUDENTS」

ウェブサイト上で、全国の中学校・高等学校の生徒作品をご覧いただけるコンテンツ「生徒作品ギャラリー ART BY STUDENTS」を公開しています。

1000点以上に及ぶさまざまな作品(2023年11月現在)を、ジャンル別にご紹介。キーワードや描画材などから作品を検索することも可能です。

国内最大級の生徒作品ギャラリーをぜひ、ご利用ください。

「ART BY」は
こちらから
アクセスできます。



各作品に「作者の言葉」を掲載。作品に込めた思いや制作意図をご覧いただけます。



「ART BY」トップページ。風景画や自画像、ポスター、木工芸、写真など、さまざまな作品を見ることができます。



光村図書
ウェブサイト

検索



小・中・高等学校
教科書訂正の
お知らせ



光村図書
LINE公式
アカウント
友だち募集中!



美術準備室 No.23

2023(令和5)年11月15日

発行人 ■ 吉田直樹

発行所 ■ 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9 電話:03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ■ Better Days(大久保裕文+深山貴世)

印刷所 ■ 梅田印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」にのっとり、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先

住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp

ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp

2023

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第23号

光村図書



特集
「私の風景を描く」
埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校

アトリエ訪問
プロダクトデザイナー

柴田文江

アートが生まれるとき

藤岡祐機

この1点

「最後の晩餐」
蔵屋美香

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。



ア ト リ エ
訪 問

第 23 回

柴田文江

プロダクトデザイナー

オムロンの体温計「けんおんくん」や
無印良品の「体にフィットするソファ」など機能的かつ
美しいフォルムのデザインで日本を代表するプロダクトデザイナーとして
活躍する柴田文江。彼女のアトリエに伺い、ものづくりへのこだわりを聞いた。

文章 長谷川 華 撮影 永野雅子



さんと日差しが注ぎ込む打ち合わせスペース。背面は、オフィススペースとの間仕切り部分に設置された棚。プロダクトデザインに関する書籍や自身の作品、そして植物や雑貨などが並べられている。

「プロダクトの存在そのものが『美しい』ということはとても大事なことです。」

建物のワンフロアをまるごと活用している柴田さんのアトリエ。一応仕切りはあるものの、天井はすべて吹き抜けになっていて、解放感が漂う。さらに窓からは、都心の一等地とは思えない豊かな緑が広がっており、明るい日差しにあふれていた。

——ここをアトリエにした決め手はなんでしょうか。

柴田 なんといっても窓から見えるグリーンです。実は、近所に住んでいる大家さんのお庭の借景なのですが、これを見た瞬間にこの部屋をアトリエにしたい！と。

——アトリエの造りで工夫されたところはありますか。

柴田 解放感を大切にしたいので、アトリエ全体をできるだけひと続きの空間にしています。仕切りはあるけれど、天井の方は抜けていて声が聞こえるので、一緒に働いている仲間の様子がわかるようになっています。

今は作品のサンプルを作るにしても、3Dプリンターなどがあるので、

効率がすごく上がりました。そういったツールを置いたり、工具を使ったり取れたりするのもこのアトリエのよいところです。

あとは小さいですけど、キッチンもあります。どうしてもアトリエにいる時間が長くなるので、ちょっと暮らしているみたいな気分にもなれ、リラックスしながら働くことができます。

——常にデザインのことを考えているのですか。

柴田 案件を受けると、それに対するアイデアの根幹みたいなものが生まれる「あっ」という瞬間まで、悶々と考え続けています。

そこにオンとオフはなくて、寝ても覚めてもという感じです。

——柴田さんの代表作の一つとなった体温計「けんおんくん」(※写真1)のときもそうでしたか。

柴田 このときは、クライアントから、自分たちのブランドを代表するような、家庭用医療機器メーカーのシンボルとなるような体温計を作り

たい、という要望がまずあったのです。

体温計は、病気のとくに使うものというイメージもあるかと思いますが。病気といえばお医者さんの存在って大事ですけど、それに匹敵するものってなんだろう、などとずっとあれこれ考えて行き着いたのが「母の愛」でした。そして、それをデザインに生かせないかと。

——それを体現したのが、あの形というわけですか。

柴田 お母さんの優しさとか賢さ、



※写真1 中学校教科書『美術2・3』P.62に掲載されている「けんおんくん」。多くの人の使いやすさや安全性などに配慮してデザインされた「ユニバーサルデザイン」の一例として紹介されている。



上／考え抜かれたワークスペース。作業の際に出るゴミなどが散乱しないようガラス板で仕切られているが、仲間の顔が見えるように、オフィスとしてはひと続きの空間になっている。左／打ち合わせスペースの一角に置かれたガラスの一輪挿し「SACCO」は自身の作品。右／アトリエ内にあるキッチンスペース。来客に出すお茶の準備をしたり、ちょっとした調理もできるので、スタッフにも好評だとか。

信頼性を裏切らないものを体温計で表現したらどんな形になるだろう、と考え続け、あのようなころんとした形が生まれました。

クライアントから依頼を受けた2000年頃は、まだそんなに電子体温計が身近ではなかったので、これまでの体温計のイメージを一新するようなデザインにしたかった、というのがあります。それで形以外の工夫として、文字の表示を縦にしました。もちろん内部のメカニズムの問題で、できないこともあります。そのあたりは機能性とデザイン性のせめぎあいになるので、何度も微調整を重ねていきました。

——デザインを考える際に大切にされていることは何ですか。

柴田 それはその時々自分の状態によって変わっていくのですが、今ここにきて、やはりプロダクトデザインは美しくないとだめだと思っようになっています。

もちろん機能性も大事ですが、プロダクトの存在そのものが「美しい」ということはとても大事なことです。だからこそ使う側が気に入るわけですし、気に入れば長く使ってもらえる。「買い物」という行為をしたいために、デザインは気に入らないけれどとりあえず買っちゃおう、という消費行動を変えたいんです。

人間って、美しくて機能的であれば、それを長く使うもの。そういうプロダクトデザインを今後していきたいと思っています。



しばた・ふみえ
山梨県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。大手家電メーカーを経てDesign Studio Sを設立。電化商品から日用雑貨、医療機器、ホテルなどさまざまなプロダクトのデザインを手がけ、レッドドットデザイン賞(ドイツ)、毎日デザイン賞、グッドデザイン賞金賞など数々の賞を受賞。現在は、多摩美術大学教授も務めている。著書に『あるカタチの内側にある、もうひとつのカタチ』(ADP)。

特集

「私の風景」を描く

授業時数や、学校の立地などの環境によっては
取り扱いの難しい風景画。

今号は、そんな風景画に「中学生にこそ向き合ってほしい」と考え、
積極的に取り組む飯田成子先生の授業を取材した。

撮影 鈴木俊介（一部、学校より提供）



授業レポート

埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校

飯田成子^{あさか}先生 × 2年生^{いいだしげこ}（1～3組各39名）

「自らの置かれた環境について深く考え始める
中学2年生という時期に、身近な風景を見つめ、描く題材を
設定している」と語る飯田先生。風景を写実的に描くのではなく、
「生徒たちが風景を見つめる中で、自身のアイデンティティに
迫るような発見や感動があれば嬉しい」と考える先生の授業には、
さまざまな工夫が散りばめられていた。

第1時

風景画について知る

4月から3か月にわたり、全11時
間で行われた2年生の風景画の授業。
生徒たちには、春休みに「風景画を
多く描いた画家について調べ、自分

の考えをまとめる」という課題が出
されており、第1時はその課題の発
表からスタートした。ターナー、ミ
レー、ゴッホなどさまざまな画家に
ついての発表がなされる中、いちば
ん人気はモネ。「影に黒を使ってい
ない」「奥行きを感じさせる構図や



上／屋上から学校周辺の風景を
撮影。見慣れたはずの景色が、
少し違って見える。
右／生徒Aさんのスライド。
着眼点や構図がユニークなのは
クラス全体で共有する。

遠く長い橋



風景のイメージ物語
屋上から見た景色。
近いようで遠く感じる。川と長い長い橋。
強風に対して、川は負けても橋は耐え続ける。
そういうたくましさと頼れる雰囲気、私の心
に響いた。

ピサロだったら、少しの雲の動きも忠実に再現するんだろうなと思った。撮影した写真には、緑がたくさん写っている。私の場合、そんなにたくさん緑を作るのはめんどくさいかなと思うけれど、ピサロは一色を薄めたり濃くしたりして、さまざまな緑を再現している。ピサロのように、無駄に色を使わず、なおかつ忠実に再現するというのを真似してみたい。
自分のエピソード
橋の近くのスーパードに行く時、長く大きい橋を見るのが決まりになっている。遠くから流れてきている川が、どんどん押し流されていく姿を見るのも私の小さな楽しみ。その橋の近くに住んでるわけではないけど、いつも通ってる道なので思い出深い道。だから選んだ。

色の対比など、1枚の絵の中にたくさん
の工夫が詰まっている」といっ
た感想が、驚きをもって共有された。

生徒たちの風景画への関心が高ま
ってきたところで、飯田先生はごく
簡単に風景画の歴史について語った。

西洋では、14世紀頃から神話や宗
教を主題にした作品の背景として風
景が描かれていたが、17世紀に入ると、
身近な風景が描かれるようになった
ことを説明。さらにカメラの発
明により、見たままの風景を描くの
ではなく、「見た風景をどう解釈して
表現するか」が大事にされるよう
になった、ということの説明した。

そして、生徒たちに、「風景を見た
ままに描くのではなく、風景から何
を感じ、どんなふうに描きたいか考
えることが大事」と強調した。

第2～4時

風景をどう描くか考える

生徒たちはタブレット端末を持ち、
校内や学校周辺で、描きたい風景を
探した。さまざまな角度から写真に
収め、同時に自分がどんな思いをも
ってその場所を描くのか、考えを深
めていく。

その後、候補を三つに絞り、それ
ぞれの場所をどう描きたいかをタブ
レット端末を用いてスライドにまと
めた。風景を見た瞬間の感動や、そ
の場所で起こった印象的な出来事
のほかに、もし自分がゴッホだっ
たらこんなふうに描くだろうといっ
た予想などもスライドにまとめて、
グループ内やクラス全体で共有。意
見交換しながら考えを深め、候補を
一つに絞っていった。



上／試行錯誤を要するトリミングと、タブレット端末の相性は抜群だ。
下／生徒が描きたいサイズに画用紙を裁断する飯田先生。

描きたい場所が決まったら、主題がより明確になるように写真をトリミングしていく。風景をタブレット端末で撮影しておく、画面上で何度もトリミングし直すことが可能だ。中には、横長のパノラマ写真のような大胆なトリミングを施す生徒も。思い通りにトリミングができれば、クロッキー帳にアイデアスケッチをした後、下描きに入る。

飯田先生は、「画用紙のサイズにとらわれなくていいよ。切ればいいから」とアドバイスし、生徒が自由な発想で描けるよう後押しした。

第5～10時

自分の表現を模索する

下描きが終わったら、次はいよいよ着彩だ。塗り始める前に、飯田先生は刷毛、スポンジ、ローラーを使った広い面積を塗る技法を実演してみせた。生徒たちは完成図を思い描きながら、どんな技法が効果的か検討する。

刷毛やローラーなど思い思いの用具を手にした生徒たちは、空や草原などから塗り始めた。まず最初に面積の広い部分から塗り進めることで、「いつまでも終わらない」という生徒の心理的な負荷も下がるそうだ。さらに、右記のような着彩の工程を黒板に大きく掲示することで、誰もがとまどうことなく取り組むことができ、少ない授業時間の中でも効率的に制作を進められるという。

水彩画 着彩のしかた

着 彩 初 期

- ① 淡い色から
- ② 遠くから
- ③ 太い筆で
- ④ 水を多めに
- ⑤ 全体を大まかに

着 彩 中 期

- ① 少し濃いめに
- ② 影の所など
- ③ 中くらいの筆で
- ④ 水は多めに
- ⑤ 色を重ねて

着 彩 後 期

- ① 深みのある色で
- ② 見せたいところを中心に
- ③ 細かい筆や水彩色鉛筆で
- ④ 説明的にならないで



左／花と草むらの部分は、絵の具チューブの口部分を画用紙に押し付けた後、手でなじませて、点描のような表現に。この独特な表現方法は、制作を進める中で生徒自身が考えた。
右／美術室から持ち出したパステルを使って、雲の影の部分を淡い色合いで表現。水彩絵の具だけでなく、コンテやパステル、水彩色鉛筆などの描画材も表現に合わせて使用する。

天候に恵まれた日は、教室の外に出て、実際の風景に目を凝らしながら描いていく。写真を見ているだけでは感じ取れない、明暗や色彩、その場所のにおいや雰囲気などを実感しながら描くことができ、生徒たちは実に楽しそうだ。

教室を出る前、飯田先生は毎時異なる声掛けを行っていた。「今日は色をたくさん見つけてみよう。1年生のときにやった混色のしかたを思い出して」「今日は、光と影に気をつけてみよう。明るいところと暗いところをよく見ようね」。

立地条件によっては、学外に出ることが難しい学校も多いだろう。その場合、飯田先生は、「窓から眺めた風景を描こう」というように学外に出なくても描ける課題を設定をしたり、「自分のプライベートな空間を描いてみよう」といった解釈の自由度が高い課題にしたりするなど、工夫をしているそうだ。



野球部で思い入れのある、ネット越しの景色を描く。

授業展開 生徒の活動(全11時間)

第1時▶導入

風景画を多く描いた画家について調べたことを発表し、風景画のおおまかな歴史を知る。

第2-4時▶制作①

風景を撮影し、どうしてその場所を描きたいのか、どのように描きたいのか言語化してまとめる。主題が明確になるように写真のトリミングを工夫し、アイデアスケッチをする。

第5-10時▶制作②

どのような形や色、技法を使ったら自分の描きたい風景を表現できるか考えて描く。

第11時▶まとめ

形や色、技法の工夫、風景の表現への関心などについて振り返りシートを作成し、完成作品はグループ内で鑑賞し合う。

学習目標

- 心ひかれる風景を見つけ、その理由を考えるとともに、思い入れを表すために形や色、技法などを工夫して描く。
- 作品を鑑賞し、その風景を描いた作者の思いや表現の工夫を感じ取る。

評価規準

- 形や色、材料、光などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などをとらえ、心ひかれる風景を全体のイメージで捉えることを理解している。(知識)
- 材料や用具の特性を生かし、自分の表したい気持ちや描きたいイメージに応じて、工夫して表している。(技能)
- 心ひかれる風景を見つけ、その理由を考えると主題を生み出し、全体と部分との関係などを考えながら構成を工夫して構想を練っている。(発想)
- 描かれている風景の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。(鑑賞)
- 美術の創造活動の喜びを味わい、心ひかれる風景を描く表現の学習活動に主体的に取り組もうとしている。(態度)
- 美術の創造活動の喜びを味わい、風景画を描いた作者の思いや表現の工夫を感じ取る鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている。(鑑賞)

第11時

振り返り、相互鑑賞

作品が完成したら、①形や色で工夫したこと、②挑戦したり試したりした技法、③風景の表現に関心ももてたか、これからの自分に生かせることはありそうかといった質問に回

答するかたちで制作を振り返るシートを作成。完成した作品は、グループ内で鑑賞し合った。同じ場所を描きながらも、まったく異なる主題の作品ができあがったことに驚く声や、「Aさんらしい!」といった、描いた人の個性のあらわれに納得するような感想が聞かれた。

生徒たちの表現のプロセス

① 描きたい風景



② 工夫して表現する



③ 完成!



Mさん ▶ 「光を印象的に描きたい」

- ① 天気の良い日に体育館裏の風景を見て「なんてきれいなんだろう」と感じ、描くことに。奥行感があるのもこの場所の魅力だと感じたので、縦の構図にした。
- ② 緑がキラキラしていたのが印象的だったので、初めに薄い黄色をのせ、その上から青を足すことで鮮やかな緑を作り出す。
- ③ 光と影を印象的に描き出すために、影となる部分には濁った色を使用した。



Sさん ▶ 「ゴッホみたいに描きたい」

- ① 事前課題でゴッホの作品を見て「ゴッホのように植物を力強く描いてみたい」と思い、学校近くの川沿いの草むらを描くことにした。草むらが画面の中心になる構図に。
- ② 絵の具を少なめの水で溶き、力強いタッチで色をのせていく。
- ③ 草むらが印象的に見えるように、画用紙の両端を切って正方形の作品に仕上げた。



Rさん ▶ 「お気に入りの木を中心に描きたい」

- ① 入学当初から、校庭にあるこの木が好きでよく見上げていた。お気に入りの木を中心に、自然に囲まれた校舎を描きたい。
- ② 木の存在感を表現したいので、枝の間から校舎が見える横長の構図に。薄い水色で空の色を塗った後、手前の木を描きこんでいく。
- ③ 年季の入った幹を描くために、絵の具の「かすれ」を生かしたり、黄色や青などの色を使って立体的に見えるよう工夫したりした。

授業を終えて



飯田成子
いいだ・しげこ
埼玉県生まれ。
跡見学園女子大学文学部
美学美術史学科卒業。
埼玉県朝霞市立朝霞第五中学校教諭。

今回の授業で特に工夫した点は、「風景画について知り、考えること」と「トリミング」です。風景画を多く描いた画家について調べたり、調べたことをクラスで共有したりすることで、一口に風景画といっても、多種多様な表現があるということに気づきます。そうして発見したことをベースに、画家ならこの風景をどう描くか、自分ならどうだろうと考えていくことが表現の工夫につながっていったように思います。授業の構想の出発点に、「自分で作品のサイズを決めるところから制作をスタートさせたい」という思いが

ありました。画用紙のサイズに、表現を縛られるのはもったいないと思ったのです。その結果、「いちばん描きたいものを目立たせるために正方形にトリミングする」といった、自身の表現したいものに合わせて、トリミングを駆使しながら構図を考える生徒の姿も見られました。完成した作品は、どれもその生徒らしさが感じられるものとなっていて、「風景画に取り組む中で、自身のアイデンティティに迫るような体験をしてほしい」という願いが少しは達成されたのかな、と思っています。

授業を参観して



中川昇次
ながわ・しょうじ
埼玉県生まれ。
群馬大学教育学部卒業。
前さいたま市立片柳中学校校長。
元埼玉県美術教育連盟長。

朝霞五中を訪問するたびに、夢中で表現活動を行っている生徒たちの姿に感心するばかりでした。飯田先生は特別なことはしていないと言っていましたが、教育環境やICTの活用、生徒の創造性に働きかける授業上の工夫などについて、さまざまな示唆を得ることができました。美術室等の教育環境は特筆すべきもので、教室に入った瞬間に創作意欲を掻き立てられます。教室内の壁面は用具や材料、資料等の刺激で埋め尽くされ、教室の真ん中には、本時の授業で使用するであろう材料や描画材が出番を待っている状態。廊下には、生徒作品等が展示され、美術室周辺が校内でも特別な場所であることが感じ取れました。教育環境が生徒に与える影響の大きさを考えずにはいられませんでした。

タブレットが使用できる状況にあり、本題材では、写真撮影・写真への補助線入れやトリミング・電子黒板との連動・途中段階の作品画像を指定フォルダに保存させることで制作過程を把握・評価資料の収集につながる等、タブレット端末をフル活用していました。また、調べた画家の表現の特徴を振り返り、画用紙の形を自由にカットし、画材別の特徴の把握や色づくりにこだわらせる等の取り組みは、新たな感じ方や感性を育てることにつながるものでした。美術の学びは、与えられた課題を正解に導くものではなく、この授業のように、生徒が自分の求める答えを見つけ、それを創造的に解決していくことなのだと思えます。

学校は、GIGAスクール構想において一人一台の端末の整備が進み、その活用のしかたが課題になっていますが、この点においても参考となる授業実践でした。生徒は常にタブレ

実践のすべてにおいて、飯田先生の教育的想像力と美術教育への熱意を感じました。飯田先生の美術ミッションに向き合い、見事に解決していく生徒たちのこれからの楽しみです。



第1回 | ふじおか・ゆうき

藤岡 祐機

1993年 熊本県生まれ

このコーナーでは、
毎回アール・ブリュット(※)の
作家を一人取り上げ、
滋賀県立美術館ディレクターの
保坂健二郎先生に、
ご紹介いただきます。

※アールブリュットとは、「生の芸術」を意味するフランス語で、
評価や流行とは関係なく、「つくりたい」という衝動から
制作された独自の表現を指します。

紙とはさみを用いて

「紙とはさみと1〜2色のクレヨン
を使って何かをつくってみましょう！」
そう言われたら、あなたはどんな
ものをどのようにつくりますか？きつ
と多くの人は、果物や木など何かを
かたどったうえで、つまり切り絵を
つくったうえで、そこに色を塗って
いくのではないのでしょうか。紙に色
を塗り、その紙をちぎったうえで、
山下清のようなちぎり絵をつくる人
もいるかもしれません。

今回紹介する藤岡祐機は、そのど
ちらとも違う手法を自ら生み出しま
した。たとえばこんなふうには。

まず、紙の裏表それぞれの一部に
色を塗ります。表は水色、裏はピン
ク色といった感じです(写真①)。そのう
えで、長方形や、ちょっと変わった
(象に見えなくもない)形(写真②)に切り

取り、さらにその形の一部を、櫛の
歯のように細く切っていきます。そ
の櫛の歯の幅は、1mmに満たないほ
ど。それゆえか、それとも切り方に
コツがあるのか、櫛の歯の一本一本
は螺旋状に巻くことになるのです。
するとどうなるか。くるくるとして
いる箇所では、裏側のピンク色が、
水色のうちに見えることとなります。
そんな櫛の歯を、長方形の下側だけ
でなく上側にも施せば、それはもう、
「櫛のようななにか」ではなくて、
「シンプルだけれど複雑な、繊細だ
けれど構築性の感じられる美しいオ
ブジェ」となるのです。

一応断っておくと、藤岡が使うは
さみはごく普通の、数百円で買える
ような製品です。

転機は小学生のとき

実は藤岡にも、切り絵をつくって
いた時期がありました。2歳くらいの
頃から紙をちぎったりするのが好き
だった彼がはさみに出会ったのは6
歳くらいの頃。よほど相性がよかつ
たのでしょう。家の中にある紙を何
時間も切り続けるようになり、やが
てそれは、抽象的な形の切り絵と呼
べるようなものとなったのです(写
真③)。その形がとてもユニークだっ
たので、小学校2年生のときには、
熊本養護学校(現:熊本支援学校)の
先生ができあがったものを額装する
ようになります。

そして、運命のときが訪れます。
熊本市現代美術館学芸課長(当時)の
南 篤 宏(故人)が同校を訪れた際
に、壁にかけてある切り絵を見て驚
き、同館の開館記念展「ATTITUDE
2002」への出品を依頼したのです。
小学生が、現代美術館の企画展に出
品作家として参加するなんて、少な
くとも私は聞いたことがありません。

両親の支え

櫛の歯状の作品をつくり始めたの
は、2001年頃、つまり小学校4年生
くらいの頃だったようです(写真④)。お
もしろいのは、制作にあるルールが
あること。柄ともいべき部分をよ
く見てください。斜めに切り込みが
あるのがわかるでしょうか。実はこ
れ、藤岡による制作終了のしるしな
のです。集中して櫛の歯を切った後、
櫛の歯とは別の場所をぱつんと切っ
て、それでおしまい。これまで丹精
を込めて切っていたはずの「作品」
が手から離れて床に落ちるのも気に
せず、すつとどこかに行ってしまう
のです。

実は彼は自閉症です。それゆえ、
制作意図について、音声言語を介し
たコミュニケーションに基づき確認
することはできません。つまり、先
ほど私が紹介したような、いつ頃つ
くり始めたかとか、どのようにつく
っているかについては、彼とともに
暮らしてきたご両親から聞いていま
す。彼らが、息子の行為に敬意を抱
き、そこから生み出されたものを大
切に思い、きちんと保管して、展覧
会に快く貸し出したりしてくれるか
らこそ、私たちは、藤岡の創造力の
幅の広さを感じ取ることができるの
です。そして、人間の「つくる」
という力の奥深さに思いを至らしめ
ることができるのです。この連載で
は、そんな作品を皆様に紹介してい
きたいと考えています。

保坂 健二郎 ほさか・けんじろう

滋賀県立美術館ディレクター(館長)。1976年
茨城県生まれ。慶應義塾大学大学院修士課
程修了。東京国立近代美術館主任研究員
を経て現職。著書に『アール・ブリュット アート
日本』(監修、平凡社)など。滋賀県立美術館
では「人間の才能 生み出すことと生きること」展
(2022年)を企画。



制作中の藤岡。撮影:高橋マナミ/画像提供:(一財)日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS



机の上にはペットボトルやドレッシングボ
トルが。制作の合間には、お茶を飲んだりアイ
スを食べたりするリラックスタイムが不可欠。
一時期は、つくり始める前に、納豆に焼肉の
たれをかけたうえで一気に食べるのが習慣だ
ったこともあったよう。手前の椅子も欠かせ
ない存在で、紙を切る際、また、紙を見なが
らどう切ろうかと思案している際、それを足
で前後左右に器用に動かすのでした。



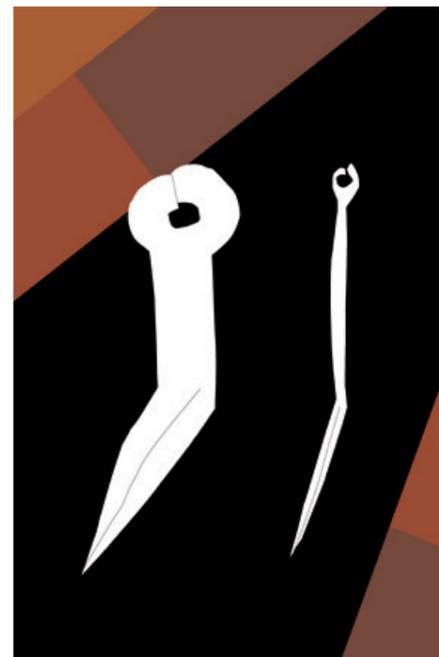
①《無題》 6.5×10.4cm 2006年頃 滋賀県立美術館蔵

黒の部分は、もとのチラシにあった色=部分。
それが絶妙に生かされたバランスになっている、そう思いませんか？



②《無題》 7.4×11.6cm 2009〜12年頃 滋賀県立美術館蔵

櫛の歯部分の左端は「まっすぐ」だけれど右端はゆるい弧を描いています。
生きものにも見えるのはきっとそのせい。



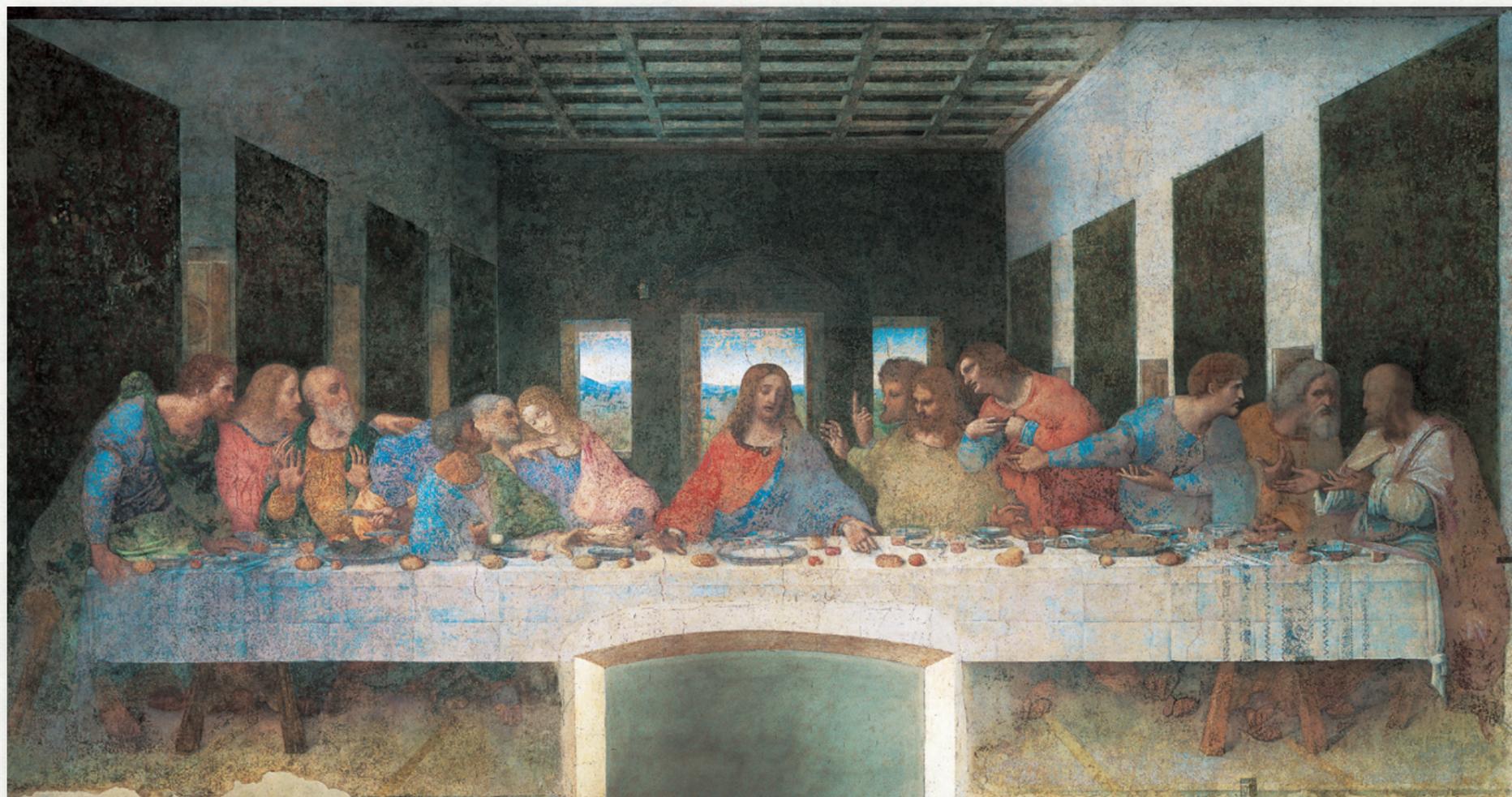
③切り絵のポストカード 14.8×10cm 2003年

先が曲がっているからとじ針か？太い左は曲がってしまった杭にも見える。
太さが全然違うのは、遠近感の表現なのかも？



④《無題》 21.4×53.3cm 2001年頃 滋賀県立美術館蔵

幅53.3cmは、櫛の歯シリーズの中では最大級。
既存の紙にあるグリッドには全く沿わずに切っている。



第 23 回

最後の晩餐

レオナルド・ダ・ヴィンチ

壁画 テンペラ 420×910cm 1495～98年
サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院蔵(イタリア)

※中学校教科書「美術 2・3」P.10-13に掲載

セリフが聞こえそうな 波乱の食卓

世界で最も有名な美術作品の一つでしょう。でも本物を見た人は多くないかもしれません。《最後の晩餐》は、500年以上前にレオナルド・ダ・ヴィンチが制作を行ったミラノの修道院に今もそのままあります。だってこの作品は壁画、つまり建物の壁に描かれているからです。建物にくっついているから、実物を見なければ遠くイタリアまで行くほかないのです。

でも出かけるだけの価値はあります。作品はがらんとした部屋の壁の上部に描かれています。少し下がって見ると、実際の部屋の壁の線が絵の中の壁の線につながり、中央にいるキリストの頭のあたりにある消失点に向かってすーっと消えていくようです。現場で見ると、この作品が一種のだまし絵の効果をもっていることが初めてわかるのです。

描かれているのは聖書に出てくる「最後の晩餐」の場面です。弟子たちと夕食をとりながら、キリストは、この中の1人が私を裏切るだろう、と語ります。

キリストと12人の弟子は全員がテーブルの向こう側に並んでいて、ちょっと不自然です。まるでテーブルの

こちら側にいる私たちに向かって劇を上演するかのようです。弟子たちは3人ひと塊になり、左右にふた塊、6人ずついます。身振りはみな大きさで、だから聖書のお話を知らなくても、キリストの爆弾発言が弟子たちに波紋を広げるようすがよくわかります。

たとえば、キリストの右隣の3人は直接その言葉を聞き、「どうしてそんなことを言うんですか」と反発しているみたいです。その隣の青い衣装を着けた人は、「隣の3人によるとキリストはこんなことを言っているそうですよ」と右端の2人に伝え、聞いた2人は、え、本当に？と戸惑っている。つまりこの作品は、中心から両端に向かって伝言が伝わるまでの時差と、それが弟子たちに順々に引き起こす心の揺れを、みごとに描いているのです。キリストの近くに座りながら固くなって思わず身を遠ざける「裏切り者」がどの人物か、あなたはわかりますか？

ちなみにこの部屋はもと修道士たちの食堂だったそう。だから絵の主題もご飯絡みなんですね。ご飯を食べながらだまし絵内の空間にいざなわれ、修道士たちは、まるで自分もこの晩餐に参加しているように感じたかもしれません。

蔵屋 美香
くらやみか

千葉県生まれ。横浜美術館 館長。
千葉大学大学院修了。
東京国立近代美術館勤務を経て2020年より現職。
2013年、第55回ヴェネチア・ビエンナーレ
国際美術展で日本館キュレーターを務め、
特別表彰を受賞(アーティスト:田中功起)。
2020年4月より横浜トリエンナーレ
総合ディレクターも務める。主な著書に
「もっと知りたい 岸田劉生」(東京美術)など。